令和５年度　第１回総合教育会議

日時：令和５年７月２６日（水）

於　：西宮市役所本庁舎８階

特別会議室

開会　午後２時００分

○事務局　　お待たせいたしました。ただいまから、令和５年度第１回の総合教育会議を開催いたします。

開会に先立ちまして、会議の出席者に関し、委員の皆様にお伺いいたします。

運営要綱第５条第３項「会議は、副市長、政策局長、教育次長の出席を求めることができる」との規定に基づき、本会議に副市長、政策局長、教育次長が出席することについて、構成員である委員の皆様に御異議はございませんでしょうか。

ありがとうございます。

続きまして、会議の傍聴に関して委員の皆様にお伺いいたします。

地方教育行政法第１条の４第６項では、総合教育会議は「個人の秘密を保つため必要があると認めるとき、または会議の更生が害されるおそれがあると認められるとき、その他公益上必要があると認めるとき」を除き、原則公開と定められております。

本日予定の議題「アフターコロナの学校生活について」は、非公開とする理由のいずれにも該当しないため、本会議を公開することに御異議はございませんでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、本会議を公開としますので、傍聴人の方の入室をお願いいたします。

なお、傍聴人の方が遅れて来られた場合も、随時入室していただくこととしますので、御了承ください。

～傍聴人入室～

それでは、総合教育会議を始めさせていただきます。

初めに、市長から御挨拶を申し上げます。

○石井市長　　皆様、こんにちは。着座にて失礼いたします。

ただいまから、令和５年度１回目の総合教育会議を開催したいと思います。

総合教育会議は、何か課題があったときにというようなことだけではなく、今の教育行政が日日しっかり回っておるかというようなことも含めて、私ども市長部局とそれから教育委員会部局と調整し心合わせする場ということでもあります。また、同時に市民の皆様方に対して、その現況に対して共有する場というような意味合いもございますので、今回は５月８日にコロナが２類から５類になりました。そういう中で、この３年間、大変教育現場にも御苦労をおかけしましたし、子供たちにも様々な制約を課しましたし、市民・保護者の皆様方からも様々な御意見をいただきながら、今日までやってまいったところではありますが、そうした中で現況、この一区切りを迎えた中で学校生活をどういうふうに回っていっているか。そして、それについて改善すべきことを引き続き課題としてあぶりだされたこと、こうしたことについて確認をしていきたい、こういうような趣旨でございます。

本来なら、６月に最初セットしておりましたけれども、御承知のように警報がちょうど出ようというそういうタイミングでございました。そうした中でございましたので、日延べをいたしまして今日となったわけでございます。

いずれにいたしましても、まずは教育委員会のほうから現況について報告を受け、そして教育委員並びに出席の皆様方から課題、質疑などを通じて、これから先の方向性、心合わせしていきたいと思っております。

それでは、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速議題に入らせていただきます。

「アフターコロナの学校生活について」、教育委員会より説明をまずお願いしたいと思います。

○教育委員会　　それでは、画面を御覧いただきながら説明をお聞きください。約２０分の説明となります。前半は、昨年度末から現在までの学校生活の状況をお伝えし

ます。それを踏まえまして、後半には今後の学校生活を考える上での幾つかのポイントとなる話題をお伝えし、皆様に御協議いただけたらと考えております。

まず、学校教育における日常生活の変化について御説明させていただきます。

令和２年以降、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、国の衛生管理マニュアルに準じた西宮市独自の衛生管理マニュアルを作成し３年間対応してまいりましたが、感染症法上の５類へ移行するに伴い、国の衛生管理マニュアルに準じ感染対策を行っております。

令和４年度３月の卒業式におきましては、卒業式のみマスクを外すことを基本とするとし、今年度４月以降はマスク着用を求めず、濃厚接触者は７日間から５日間の待機に変わりました。そして、５類感染症となった５月８日以降につきましては、インフルエンザと同様、陽性者でもこれまでの制限はなくなり、濃厚接触者の特定もしておりません。２類としていた５月７日までにつきましては、発熱等の風邪症状の場合、出席停止としておりましたが、５月８日以降、病気による欠席となりました。陽性と判断された場合については出席停止となり、停止期間については５日間となっております。臨時休業、学級閉鎖については、児童生徒の欠席状況を鑑み校医に相談の上、学校長の判断により行います。

次のページに行かせていただきます。

保健衛生について説明いたします。情報につきましては、最新のものにさせていただいております。

４月より、マスクの着用を求めないとすることを基本としておりましたが、４月以降の着用率は高く、５月８日以降も小学校の低学年では多くの児童がマスクを外していますが、高学年から高校まで１割から３割程度しか外しておらず、着用率は高い状況でございました。しかし、７月に入り気温の上昇とともに熱中症のリスクが高まったこともあり、着用率は下がってまいりました。小学校では２割から３割程度、中学校では６割程度、高校では５割程度となっております。

感染者数と学級閉鎖等の状況については、４月以降、１日陽性者の数は０．８人で、閉鎖はございませんでした。５月８日以降、５類へ移行された後、教育委員会への感染報告というのはなくなりまして把握はしておりませんが、現在までに３校３学年、８校１２学級で閉鎖がございました。その後、大きな広がりはございません。

次に、学校の教育活動について少し現状を申し上げます。

基本的に距離や換気、声の大きさなどに留意しながら制限のない教育活動に戻すこととなっております。教室の座席については依然として前向き、隣とは席の距離は空けているところがまだ多い状況です。一方、ペア学習、グループ学習など話し合い活動が復活し、子供同士が対面で話をする場面というのが多くなってきております。授業の中で、これまで制限を設けられ感染リスクが高かった理科の実験や調理実習、音楽、体育についても換気や間隔に気をつけながら通常どおりの実施を行っております。やはり、まだマスクをしている子供が多いのですが、気温が高くなっていることから学校では体育の授業を気にかけています。ある小学校の校長先生からは、「最終的に個人の判断に委ねることを前提にマスクを外す声かけをしていきます。」というお手紙を保護者に配付し、熱中症予防に取り組んでいるということを伺いました。水泳につきましては、昨年は一度に入る人数を制限するなどかなり制限した中での実施でしたが、今年度については通常の運用で実施しました。次に給食ですが、まだ前向きで食べる場面が多いようです。黙食ではなく、話をしながらとなってきているようですが、まだ心配がぬぐえないということです。しかし、右の写真のように少しずつ一定の距離を取って対面で食べるところも出てきております。

次に、タブレットの活用について申し上げます。

学級閉鎖などの緊急事態に対応するためのツールとして、タブレットはとても注目度が高いものでしたけれども、学級閉鎖時の活動ではなく通常時においても活用が進んできております。学級閉鎖時には、家庭学習の課題として利用していたデジタルドリルが通常時の宿題として活用されたり、次の日のオンライン学活等の連絡の指示を

出していたことが、通常時には連絡帳としての活用に変化していたりと、緊急時の対応だけではなく通常の学校生活にも入り込んできているツールとなってきております。また、１人１台環境が整ったことから、通常授業の中でコロナ禍以前と比較して気軽に使い始めていることが見て取れます。

さて、令和４年度なんですけれども、１学期末に教員対象のアンケートを行いました。学級閉鎖が発生した場合に「オンライン学活ができるか。」、「授業配信ができるか。」、あと「コロナで登校できなくなった児童生徒に対して授業の配信ができるか。」という質問をしたところ、スライドにあるとおりの高い割合で「対応可能である。」と回答を得ました。令和２年度からの積み重ねで、緊急事態のときの対応は一定の水準に達していると思われます。なお、令和５年度についても、学級閉鎖を想定して準備をしておくようにと指示を行っております。

校務改善を目的としたＩＣＴ活用というのは、コロナ禍以前より様々な方法で講じてまいりました。

１つ目は、コミュニケーションツールとしてのＴｅａｍｓの活用です。以前から活用予定としていたのですが、コロナ対応として急速にツールの活用が進み、会議の精選とともに情報共有の効率化が図れるようになったものです。

２つ目の欠席連絡システムの導入です。児童による連絡帳の受け渡しが難しくなってしまったための導入でしたが、欠席連絡の効率化が図られ朝の欠席電話連絡も少なくなり、教員、保護者とも負担が減った等の報告を受けております。

また、校務改善に大きく関与したものとして、採点支援システムがあります。中学校、高等学校に導入したのですが、採点終了とともに得点計算が終わるため、非常に効率化されたという御意見を伺っております。

行事についてです。

授業参観、懇談会については、これまで分散していたものがなくなり制限のない形になったことを喜ぶ声がよく聞かれます。コロナ禍では、体育会、音楽会、図工展な

ど運営をどういったものにするか工夫を余儀なくされました。分散したり、オンラインを活用するなどの新しいやり方を試すことで、様々な気付きもありました。制限が緩和された今、その経験を生かした行事の実施方法を各学校で考えています。

校外学習、自然学校、修学旅行などの基本的な感染防止対策を講じながら、コロナ禍前の実施状況に戻ってきています。少し具体的な報告をいたします。

小学校５年生で実施する「自然学校」です。昨年度、令和４年度は２泊３日の宿泊と、そのほかに１日単位で２日間、自然と触れる体験を校内または校外で取り組みました。今年度は、４泊５日の自然学校の実施となっております。５月８日にスタートし、１学期末までに１９校が終了しております。宿泊場所は、３７校が山東自然の家を利用し、淡路青少年交流の家や南あわじ自然学校で４校実施する予定です。

今年度実施した学校の様子です。飯ごう炊さんをしたり、キャンプファイヤーをしたりするなど自然に触れ、非日常の生活を経験しています。多くの学びを得るとともに、仲間との絆が深まり感動を味わい、すばらしい思い出となっているようです。残り２２校については、これから順次実施し１１月に全校が終了する予定です。

次に、中学校２年生が実施する「トライやる・ウイーク」です。現在、西宮支援学校を含めて２０校が終了しております。昨年度は連続した５日間の実施でしたが、コロナ禍で事業所の受入れが難しく、５日間事業所での実施をする学校と、５日間のうちで事業所での活動と学校を中心とした地域とつながる活動を組み合わせて実施する学校と、大きく２つの実施方法となりました。今年度は連続した５日間の実施は変わらないですが、原則、事業所での活動をお願いしております。昨年度に教育委員会も事業所バンクをつくり、事業所の確保に取り組みました。また、５月８日には５類に引き下げられたのですが、事業所への受入れのお願いは昨年度に行っておりますので、やはり今年度も事業所確保は難しかったようです。多くの中学校のホームページには、トライやる・ウイークの様子がアップされておりますが、その様子を見ても充実した取組がなされたことが分かります。コロナ禍の中で、子供たちは人との出会いも制限

されていたと思います。社会の中で共に暮らす、様々な人との出会いは教育にとって大切なものであり、トライやる・ウイークは体験を通じて多くのことを学ぶ貴重な機会となっております。

次に、「修学旅行」についてです。スライドにはありませんが、２年前の令和３年度は２度の緊急事態宣言が発令され、多くの学校が２度の修学旅行の延期をするということがありました。中でも、中学３年生は１２月には進路選択の時期となるため、実施可能な時期が２か月ほどに限られました。全国の学校が、この時期に一斉に修学旅行に動いたため宿泊施設の確保ができず、やむを得ずゼロ泊や１泊となりました。昨年度、令和４年度は、全校が泊を伴う形で修学旅行の実施ができました。行き先は、小学校が広島方面、鈴鹿方面、中学校は県内姫路や淡路島をはじめ京都や滋賀、和歌山など近隣府県が多くありました。今年度は、中学校も全校が２泊３日を予定しており、近隣だけではなく信州、北陸、四国や九州にも拡大しております。小学校１校を除き、小中学校はほぼ全ての学校が１学期に終えました。西宮支援学校高等部は１０月に京都方面、西宮東高校は１０月に沖縄、西宮高校は１２月に北海道に行く計画です。ある中学校で、修学旅行後にマスクを外す生徒が多くなったとの話がありました。お風呂に一緒に入ったり同じ部屋で寝たりと、素顔で過ごす時間が増えたためかもしれません。コロナ禍で過ごした生活環境は、まだまだ子供たちの心や体に影響を与えているようです。授業や行事を通して「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育んでまいりたいと考えております。

ここからは、「これからの学校の在り方」についての話です。

新たな学習指導要領や西宮教育の方針を基に、各学校では１年間の学習の計画、つまり教育課程を編成します。「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の「知・徳・体」を大切にして、子供たちの主体的な学びを進めます。コロナ禍では、教育活動が制限されましたが、これからの学びに生かせることもありました。

これからの学校の在り方を考えるポイントとして、１つ目は日常の学習の工夫です。

「個別最適な学び」、「協働的な学び」が求められる中、以下のような学びの在り方が求められています。

２つ目は全市的なものを含む、各種行事の工夫です。学習内容と標準授業時数が増加しているため、ゆとりと授業時数の両方の確保が求められています。全市的な取組は、教育委員会と学校現場の代表で教育課程検討委員会を設置して検討を進めています。

これまでの教育課程検討委員会の協議内容を御説明いたします。

教育課程の編成権は学校長にあるわけですが、全市的な行事や長期休業日の設定など大枠の部分で市内の学校がそろえる必要のあるものについては、教育委員会と校長、教頭、教員からなる教育課程検討委員会で検討し提言を行っています。平成２９年度に学習指導要領が公示され、小学校の外国語の授業時数の増加など大きな変化があったことから、委員会を平成２９年度から令和元年度まで開催いたしました。そこでは、年間授業時数の確保が大前提として、全市的な行事の見直しと夏季休業日の２日間、冬季休業日の１日の計３日間の長期休業日の短縮、これは３年間の試行実施をすることが提言されました。

続いて、令和３年度から４年度までの教育課程検討委員会では、全市的行事検討委員会からの報告を受け見直しを提言いたしました。長期休業日の短縮は、コロナ禍に突入し授業日や行事などが通常と異なったために、その検証が十分に行うことができませんでした。そこで、試行の継続を行い効果の検証を行っていくこととしました。

続いて、今年度、令和５年度の教育課程検討委員会の協議予定です。

先ほど申しましたが、試行実施をしております長期休業期間の検討をいたします。授業時数確保とともに子供にとってのゆとりや、教師の働き方改革の視点も合わせて検討する必要があると考えております。その中で、春休み期間の延長といったことも考えていきたいと思っています。また、授業時数確保が一番難しい中学校３年生についても、週時程や卒業式の日程の検討を行っていく予定としております。

少し話は変わりますが、これからの学校の指導体制にも工夫が必要です。コロナの関係や様々な理由で、教員不在や未配置の状況があります。また、多様な児童生徒や保護者への対応に、担任だけでは難しくなっている状況もあります。限られた人数での学校運営となっているため、職員の協働体制が必要となっております。

表にありますように、学級担任制だけでなく教科担任制やチーム担任制などの工夫が検討されています。どの体制にもメリット、デメリットがありますし、児童生徒の発達段階にも配慮が必要です。

以上が、本日御協議いただくための資料となります。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

そして、ここからは教育委員ないし出席の皆様から、現状についてそれぞれ御意見をいただきたいと思いますが、まずちょっと口火を教育担当の漁次長のほうにお話をいただきたいと思います。結局、まずコロナに関しましては今、本当に修学旅行に行けるようになった。プールもできた。そういう中では、取り戻されたことがあったということは、それは素直にいいことだなと思う。あわせて、コロナがあったゆえにけがの功名というのでしょうか、学校の校務の改善というのも少し進んだ部分もそれなりにあるだろう。ただ、まあ、じゃあ、今もう一つあけたから、それをもってして取り戻されたしよかったよかったということだけではなくて、今なお取り残された課題、今なお残る課題ないし、この３年間で本来ならば得られた機会を得られなかった子供たちが、しかし３つ年を取っちゃったわけですから、そのことによって今思われる、そして現場を見る中で課題というようなこと、こうしたことなどについて認識があればお聞かせいただきたいのですが、よろしくお願いいたします。

○漁教育次長　　学校現場で取り残された、いまだ取り残された課題というようなポイントになるんですけれども、やはり３年間、非常に大きな制限を受けた学校生活を送ってまいりましたので、一番子供たち同士、もちろん教師と子供、その距離感が少なからず遠くなっているんじゃないかなということを感じております。もちろん、発

達段階に応じてその距離感というのは短い距離から、年を得るごとに距離は適切に広がっていくんですけれども、それが本来の形ではなく少し強制的に距離を取らされたと、お互い顔の半分見えない状況での生活を強いられたというところが、非常に大きな課題として今でも残っているのかなというふうに思っています。

その中で、やっぱり教育委員会としましては、教育長が自らが機会あるごとに学級経営をしっかりと立て直してほしいということを指示されております。学級経営の中で、学級づくりの中で子供たちの適切な距離感であるとか、適切な関わり方であるとか、そういった学級の活動を通して自らの学級での生活がよりよいものになるために課題を見つけたり、その課題を解決するためにはどのようにしたらいいのかというようなことを話し合ったり、そうした中で解決策を見出して合意形成を経て改善していくというような、そういったこれまで普通に行われてきたそういった活動をしっかりと取り戻してほしいということを、この４月から各学校のほうに依頼をしているところです。ですので、本当に手始めというところになるんですけれども、そういった学級内、それから学校内の子供たち、そして教員と子供たちとの人間関係づくり、信頼関係づくりというようなところをしっかりと取り組んでいかなければならないなというふうに認識しています。

それから、行事のことについてなんですけれども、行事もやはり３年間簡素化であるとか２部制、３部制というか、それぞれ感染防止対策を取りながら行事を進めてきたわけなんですけれども、この３年間で教師もたくさん入れ替わっております。教師の入れ替わった分、今度、新しいこれまでの授業、これまでの行事を取り戻すためにはどんな取り組みをしてきたのかというようなところが、非常に分かりづらい状況になっています。そういった中で、そういう行事を組み立てていく中で、一回その行事は子供たちにとって何を学ばせるのか、何を学び取らせることができるのかというようなことを、改めてしっかりと教員が理解した上で子供たちに取り組ませるというような、そういった本当に基本的なことなんですけど、そういったことがこの３年間の

ブランクの中で少し見えづらくなっているというか、これまでは毎年毎年授業をこなしている行事をこなしているわけですので、そういったことが順繰り順繰りと引き継がれていったんですけれども、そういったところが３年間中断されているというところは、一つ大きなポイントかなというふうに思っています。

やはり、行事は子供たちのためにあるものですので、子供たちにとってプラスになる行事づくりというようなところを大切にしていきたいなというようなことを、各学校のほうに依頼をしているところです。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

そういう意味では、行事はそもそも何のためにあるのかという、そういう意味では本質的なことを問い直す機会にもなったという、そういうようなことでもありますから、そこはぜひ惰性でなく深めると、忙しい中ですから場合によったら足すばかりでなくて、引くというようなことも含めて進めていっていただければと思います。

じゃあ、これからは順次、教育委員の皆様から、これからの学校の在り方についても先ほどありましたけれども、教育委員会からの報告などについて並びにこのコロナ前後のこともございましたので、それぞれ御意見・御質問等ございましたらお願いします。

山本さんからお願いいたします。

○山本委員　　今、事務局の説明を聞いておりまして、回復傾向にあるということがまず一つありまして、それはいいなというふうに思っています。

ただ一方で、この３年間で進化したり様々なことも登場したりしてきていて、課題も登場してきていると思っていて、たくさん御説明がありましたけれども、２つに絞って話をしたいと思います。

１つは、先ほどからもありますタブレット、ＩＣＴのことです。これは、コロナがもたらした唯一いいことだったと思います。一人一人の配付が早くなった。これ実際、活用も頑張っていらっしゃいます。でも課題としては個人間、学校間格差ということ

をさらに詰めていくということも必要なんでしょうし、更新の課題も出てきています。プラス、あと一つ課題が出てきてしまいました。生成ＡＩなんですね。これは、避けて通れないと思っています。避けて通れないというか、考えざるを得ないなということです。振り返ってみれば、これが出てきたのが昨年の１１月末ぐらいです。半年ちょっとで今、こんな状況まできているということです。すごい速さで広がってきていて、正直、教育現場も進化についていけていないというのが正直感じるところです。今、様々な議論が出ていて教育のほうで言えば、この前、７月４日に文科省からガイドラインの案が出ました。これは、必要な場合は検証して限定的に使おうというようなことで出てきているんですけども、これに対して様々な声があります。いくつかの市町も使わざるというか考えざるを得ないと言っています。禁止してもあるものは使うわけだから、思考力を育てるためにどう使うかということの具体を少しずつ考えていく必要があるというふうに思っています。

実際、使ってみないといいか悪いか、どんなものかということは分からないわけで、私もかなり使ってみましたけども、使ってみると結構感じるものがあります。翻って今、学校現場の先生がどれだけこれを使ってるんだろうというのがちょっと気になっています。忙しいのは承知です。でも、今、夏休みは比較的使える。だから、ぜひともそういう機会にしてほしいと思います。

ただ、それを感じる一方で俯瞰してみたときに、教師の数が足りないという現状がずっとあります。一方でＡＩがこれだけ進化してきている、このギャップをどうするんだという、何かここがどうしても引っかかってくる。不安というか、これは全国的なことなんですけども、ここをどうするかということが大きな課題としてあるということは、改めて感じています。

あと一つは、行事のこととも関係して、中学校の卒業式の日程のことです。先ほどありましたが、結論から言うと、私個人の考えは入試後に卒業式をするほうがいいのではないか、見直す時期に来ているんじゃないかというふうに感じています。理由は

大きく２つあります。１つは神戸新聞がアンケートを何回かとっていますが、保護者の方の、大体６割以上は賛成というアンケート結果が出ています。あと一つは、県下とか近隣市町の動向は完全にそういうふうに動いてきているということです。コロナ前の２０１９年は、ほとんどの学校が入試前に卒業式をしていましたけれども、２０２２年県下では４５％の１５０校ほどが入試後にしているんです。これは、感染の防止を考えて、卒業式を最初にするとみんなが集まってくるので感染しやすくなる。それで、後にしようと考えられたんだろうなと勝手に想像しています。この傾向はこれからも強くなるでしょうし、兵庫の第１学区はそういうふうにしています。第２学区も阪神の北はそういうふうにしてきています。これは教育課程のことですから校長会との連携も必要なんですが、やはりこの動きは止められない。もう見直しの時期に来ているというふうに感じています。

以上の二つです。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

じゃあ、４名順次言っていただいて、じゃあ、長岡さんよろしくお願いします。

○長岡教育委員　　私は、３点お話させていただきたいのですが、まず１点目は、ＩＣＴとかオンラインのポストコロナのことを語るには避けざるを得ない話題だと思うのですけれども、大学でもオンライン授業、オンデマンド授業、それから対面とそれらを組み合わせたハイブリッド授業というのがあるんですけど、コロナの真っただ中のときは、もちろんこれは大学だけではなくて、これをやむを得ず導入していた時期だと思うのですが、もはやその時期は過ぎていて、これからはそれを積極的に取り入れなければいけないときもあるんだなというふうに感じています。

ただ、分かったことは、オンラインに適した学びと適さない学びがあるということが明確に分かってきたので、多様な方法があるんだけれどもどういうふうにしたら効果的なのか、合理的なのかということを一歩踏み込んで、ＩＣＴを活用した学びを考えていかなければいけないときに来ているなというふうに思います。

それから２点目は、学校行事とか部活動とかそういうこと、さっき御説明があったんですけど、私たちは経験的にこういった修学旅行とか体育大会だとか自然学校とか部活動というものが、さっき次長も距離感が遠くなったという話ですけれども、お友達をたくさんつくる機会にこれがなっているとか、多面的な学びで人間形成を促しているということを、私たちは経験的にそれを知っているんだけれども、コロナによってさらに担っていた内容の重大さというのを再認識したというか、痛感したなというふうに感じています。

ですから、今後はこういった活動が何らかの理由で制限されて、精神的な健康だとか身体的な健康だとか、それから人間形成の機会を大幅に損なって失っていくということを肝に銘じて、重要さを感じてこれらの活動を大切にしていかなければいけないというふうに、私自身は思っています。

それから３つ目ですけれども、これはコロナにかかわらずですけど、子供たちに教える側の私たち先生とか大人がもっともっと質を高めていかないといけないと思っていて、少し前に学校の授業を委員の先生方と見に行く機会を与えていただいたのですが、そこで先生の授業感とか、それから子供感とか、教材感とか何かそういった信念とか価値観に支えられて授業を実際にされているなということをすごく感じて、とてもいい授業を拝見したわけなんですけれども、そういった先生方の学び全体を振り返る時間が今、十分に取られているのかなというふうに思います。先生方、とてもお忙しいと思うんですけれども夏休みなんかの長期的なお休みを利用して、やっぱり学び全体を振り返るような機会というのをつくらなければいけないんじゃないかというふうに感じます。具体的に言うと、書きながら振り返るという作業ってとても重要だと思っていて、研究論文とか科学論文とまではいかないまでも、しっかり自分がやってきたプロセスというものを、それから学校を組織してきたプロセスというようなものを書いてまとめて振り返るというような、そういったことも必要だし、そういった力も教師にとっては必要ではないかなというふうに思うので、学校の中だけにとどまら

ず、いろんな外部との社会とのつながりも大事にしながら、そういった教員の研修の場というものも、これからは充実していくのが重要ではないかなというふうに思います。

以上です。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

そしたら、側垣委員お願いします。

○側垣教育委員　　私のほうからも、２点ほど感じていることをお話します。

１つは、コロナ禍でマスクの着用率の話がありましたけれども、一番気になっていたのは、マスクによってコミュニケーションの力が非常に阻害されているというか、どこかの政治家が日本人は目でものを言うから、マスクをしていても大丈夫。それで感情をくみ取るから大丈夫やみたいな話をされたんですけど、子供は違うんです、全然。まだ成長発達段階にある時点で、マスクをしていて相手の表情をくみ取ってということはできない。一番大切なのは、子供にとっては相手の表情、そしてその経験を脳の発達を促して成長につながっていくという、確かな発達の経路があるんですけれども、それがこの３年間で非常に阻害されたんじゃないか。特に、乳幼児から幼児期、学校に上がる前の子供たちがこの３年間、その経験を積むことができなかったという影響は、今後かなりあるのではないかと、これから小学校に上がっていく子供たちも、その影響を受けた子供たちであるという取組を考えていかなければいけない。実際に、イギリスのオフィステッドと言って、教育や福祉の評価機関があるんですけど、そこの調査でもかなり影響があるという報告もされていますので、今後その辺りを踏まえた教育の構成であったり、それから学校での生活の取組について考えていかなければいけないのではないかなというふうに思います。うちの施設に、小学生、中学生、高校生がいるんですけれども、やはりなかなか思春期の子供たち外しにくいというか、お友達が外し始めてみたいな感じで自分から率先して外しにくいんだというふうな気持ちを持っている子供たちも多いので、その辺りも生活の中でサポートして

いかなければいけないなというふうに思っています。

私が気になっているのは、そのこととともう一つ、指導体制の課題ということで教員のなり手が不足しているということと、保護者への対応とか生徒の対応ということで担任だけでは難しいと先ほどのスライドにもありましたけれども、学級担任制と教科担任制のメリット、デメリットというのをかねてから、小学校の段階で学級担任制が中心になるんですけれども、グループを一人の人間で全責任を持って対応していくというのはかなり無理がある、あるいは学校の先生方の孤立感なり、そういうものが生み出す素地が非常に強いんじゃないかなと、長岡委員からも先ほど報告がありましたけれども、先生方の振り返りというのも、なかなか学級担任制で全教科を担当しているとなると難しいところがあるんじゃないかな。中学校の場合は教科担任制で、様々な先生方が教室に出入りをして、またその情報交換、授業中の様子なんかも連携して取り組まれると思うので、このチーム、教科担任制、チーム担任制というふうな方向も今後積極的に考えていく必要があるんじゃないかな。多分、施設がホーム制を取っているんですけれども、グループでホームに複数の担当者がいて、それぞれ適切な子供への関わりを進めている、生活の中でもそういうことをしていますけれども、学校の中でも今後このチーム担任制によって、共同で子供の教育あるいは子供の育ちを見ていくという方向性が必要なんじゃないかなというふうに、私は個人的には思っています。

以上です。

○石井市長　　藤原さん、お願いします。

○藤原教育委員　　藤原です。私からは、３つ半ほど指摘させてください。

１つ目は、まず行事の在り方ということになります。コロナ禍において、様々な行事、特に保護者が関与する行事というのが、いわゆる入れ替え制というのが取られました。特に運動会だったと思います。これはこれで、１日潰れないということで保護者としては楽だったんですけれども、ただ、何のための行事なのかと考えたときに、

特に運動会においては上が下に見せる、下が上を見るという、学年を越えたつながりをつくると、自分たちも将来はああいうことができるようになろうというふうな形を見せるというところに、非常に大きな意義があったということを考えれば、元に戻るということが当然歓迎すべきことであろうというふうに考えます。といった、行事は何のためにあるのかというのを改めて認識する機会になったなというふうに考える次第です。

２点目は、山本委員から御指摘があった卒業式のことです。これは高校、中学の卒業式について、高校入試の後になるのか先になるのかというのは議論されているところでありますけれども、私としての結論としては、高校入試の後に中学卒業式をやるのが合理性があるのではないのかなというふうに考えます。山本委員から、その意味がない、近隣市の比較との関係で動きが止められないという御指摘もありましたが、それに加えて中学校の卒業式というのは、他の学校行事と比べて非常に象徴的な意味が大きいと思うんです。義務教育の終わりであるし、あるいは中学までというのは地理的な束縛の中に子供たちは生きているわけですけれども、高校以後というのは、地理的な束縛というのは緩くなるわけです。校区が一気に広くなると、もしかしたら遠くの高校に行くかもしれない、あるいはそれぞれの専門性のあるところの高校に行くかもしれないというところで、単なる学校行事に比べると非常に象徴的な意味があると、あらゆる学校行事は日常的、非日常の形になるんですけれども、中学卒業式というのは非日常という、卒業式が終わった後に戻ってくる日常は従前と違うという位置づけになっていると考えます。そういうふうに考えたときに、戻ってきた日常の先に高校入試だという人生において最も緊張を強いられるだろう一日が控えていると、その象徴的意味が薄れてしまうのではないかなという懸念があります。その中学卒業式というものの意味を、確かにするという意味でも高校入試以降に中学の卒業式というのはなされるべきではないのかというふうに考えます。

３点目は、ＩＣＴの導入に関わるんですけれども、子供たちの目のことです。これ

も統計上、コロナ禍以降、子供の視力が下がっているというふうなデータが出ていたと思います。私の視力は下がっているのですが、これはきっと老化に基づくものであるというふうに考えておりますが、子供たちは老化ではありませんのでゆゆしきことなのかなというふうに思います。「宮っ子アイ・ケア」というものがなされましたけれども、例えば２０分ごとに休憩を入れるというふうな実践が現場でなされるようにしていただきたいと思います。

３．５個目と申し上げますのは、０．５個は、ちょっとここには出ていないんですけれども、今日も本当に文字どおり殺人的な暑さであります。これは、今後この傾向が続いていくと思います。結構、真面目に中学校における自販機の導入というのは、検討されてもいいのかなという気がしてきております。近隣市、いろんなところで導入されております。これが、神戸市の事例であったのが、生徒会が主体になるというふうなことが紹介されておりました。となると、一つの教育効果としての自販機導入ということにもなりますので、教育的観点からも意味があるのかなと考えました。これが０．５個目です。

以上です。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

極めて多岐にわたりますのですが、せっかく今日、次長さんがいらっしゃいますから、藤井さんから副市長と清水さんとフリーに意見を出していただいて、それでお願いします。

○藤井教育次長　　学校施設に所管している次長ですので、生徒が安心して学校生活を送れるようにということで、国の補助金を使って完全対策の予算というのを取っております。すると、教員の働き方改革の面でいくと、コロナの部分でＧＩＧＡスクール構想と一緒になった時期でしたのでＩＣＴ化がかなり進んだという面があって、例えばＷＥＢ会議ですとか情報共有ですとか、業務の効率化などが進んできたわけです。それで、コロナが２類から５類に変わったということで全てのものを戻すのでは

なくて、いいものは継続発展させていくというところが必要なのかなと思います。

私のほうからは以上です。

○石井市長　　それでは、北田副市長。マイクをデリバーしていただいていいですか。

○北田副市長　　それでは資料を見せていただいたことと、それから今、皆さんが御発言されたことを踏まえて何点かお話させていただきます。

まず、コロナ禍が長引いた中で、本当に学校現場が非常に苦労されて、そしてようやくここに来て、恐る恐るではありますけど、本当の意味での本来の学校生活を取り戻しつつあるのかなという、そういう感想をまず抱きました。

ただ、その中で一つ気になるのがコミュニケーションの問題ですね。先ほど山本委員が言われた、それから側垣委員が言われましたが、特に高学年になるほどマスクの着用率が高いという点は、数値的に中心になるところであって、物心がついて自分の表情が見られるのが怖いとか気になるとかというのを、学年が高くなるほど気にするんだろうなというふうに推測はできるんですけど、何かそこにもうちょっと積極的に手当てできるものがないだろうか、もっとマスクを外していいんだよみたいなことを、単なる感染防止の観点だけではなくて、コミュニケーションを強化するという意味での働きかけみたいなことができないだろうかというのは、ちょっと感じたところです。これが、まず１つです。

それから、もう一つはＩＣＴの話で、コロナの緊急時だけじゃなくて平常時にＩＣＴの活用ができるようになってきましたという報告があったところ、これ非常にいい話だなと思ってまして、もともと非常に高額な経費を投入してＧＩＧＡスクール構想という、たまたまコロナと時期が合いましたので一気にＩＣＴ機器の普及が進んだわけですけども、本来は今、報告があったみたいに日常の学校現場、教務活動で使っていただく、そこにＩＣＴを活用して効率化しようよというのが本来の趣旨ですので、ようやく本来の趣旨が発揮できつつあるのかなというふうに思っています。ぜひ、こ

れをこのまま延長線上に進めていただきたいなという思いと、一方で、資料の中にちょうど１年前ですけど、緊急時のタブレット活用がどれぐらい進んでいるかという評価があったんですけど、このグレーでいう使ったことがないというのが、ちょっとまだ残っているところが残念なところで、時間がかかるのは当然のことだと思うんですけど、また再拡大、パンデミック、そういう時期が来たときには、もっともっと全体的に使える割合が高くなっていっていただきたいなと、これは希望的お願いとして申し上げておきたいと思います。

それから、ＩＣＴの関係で生成ＡＩの話が山本委員のほうから出ましたので、行政としてどう考えるかと非常に我々も悩んでいるところです。正直、各自治体でまだ様々取扱うことなので、ただ一貫して言えるのは、一律に禁止できるものではないだろうという意味では山本委員の考えと全く同じなので、何がしの活用については一定の制約のもとで活用できるべきところは活用していくんだろうなと私は思っています。ただ、そのときに今日改めてそういう御意見もお聞きしたので、単に市長部局だけ、行政的な観点だけで考えるんじゃなくて、学校現場、教育的な見地も含めて取扱いについては考えていくべきなんだろうなと、改めて今日教えていただきましたので、しかるべき時期に検討させていただきたいと思います。

最後に、かねてから申し上げてきたことなんですけど、特にコロナ禍で情報発信の重要性みたいなことをずっと私、言い続けて来てまして、特に学校現場で様々な通知だったりお知らせをする中で、非常にばらつきがあってはなかなか市民の皆さんの安心感が得られないということで、かなり教育委員会現場に頑張っていただいて改善をされてきたと思います。特に、保護者の方に出す通知みたいなものは非常にボリュームもたくさんになってきましたし統一感も出てきたなと思うんですけど、その一方でもう一点、一般の市民の方に情報を流すときに、これは教育に対する安心感みたいなところの醸成につながっていくと思いますので、ぜひそこが今後も市民向けの情報発信についても用いていただきたいな。これは改めてお願いして、私からの意見とさせ

ていただきます。

以上です。

○石井市長　　岩崎副市長、デビューです。お願いします。

○岩崎副市長　　４月から田村の後任で副市長になりました、岩崎です。どうぞよろしくお願いいたします。

すごく教育現場って、対面で先生と生徒がコミュニケーションを取りながらやっていくのはすごく大事にされてきた現場かなというふうに思っていまして、コロナになったことによってオンラインになるとかということで、ＩＣＴがどんどんどんどん現場に入っていって先生と生徒の関係であるとか、あるいは先生の校務の管理自体もＩＣＴを使うようになってたということが、すごく今回聞いて分かったんですけども、その中でＩＣＴが入ってくると２極化という、使える人と使えない人というところの問題は必ず出てくるので、そういった点で生徒さんに対して、ＩＣＴが苦手な生徒さんに対するフォローというのはどういうふうにしていくかというのもすごい大事だと思いますし、逆に先生が多忙を極めているところ、ここの採点支援システムで半日で採点ができたとかいうところで、どんどん積極的に入れていって労力を省いていくということも、さらに進めないといけないのかなというふうに聞いて思ったところです。

ですので、本当にこれからはＩＣＴと上手に付き合っていくということが大事になると思います。そういう点で、何か市長部局のほうで考えていけたらなというふうに思いました。

以上です。

○石井市長　　はい。政策局長。

○清水政策局長　　政策局の清水です。

かなり北田副市長のおっしゃることとかぶることも多いのですけど、まず山本委員のおっしゃっておられた生成ＡＩの話については、やはり我々以上に子供たちという

のはそういうものに抵抗なく取り入れていけるということで、我々よりも多分広まっていくのも早いだろうと思いますので、それを禁止するということはなかなか難しいので、それは広がっていくんだという前提でその対応を考えていく必要があるというのは、まさにその通りだなというふうに感じています。

あと、長岡委員からお話がありました、「先生、大人の振り返り」という話につきまして、先生方コロナで本当に３年間、あわただしく過ごされてきたと思うんですけども、その中で非常に苦しい思いをされた中で、次に生かせることもたくさん経験されたと思うんですけど、それを整理するためにやっぱり振り返るということが必要になるんですけど、確かに僕らもそうだなと思って聞いていたのが、振り返るときに自分が経験したことをある程度客観視しないとなかなか整理できないということもありますので、そういう意味では書きながら振り返っていただくような時間が取れるようにできればいいなというふうにして聞いておりました。

あとは、側垣委員からマスクのコミュニケーションへの影響もあるしというのは、まさにその通りだなと思っておりまして、確かに日本人と欧米人では目と口の役割というのは多少違うか分かりませんけれども、コミュニケーションと言えば言葉と目と口の表情というのは、言葉と同じくらい大きな要素を持っている中で、その中で口での表情というのを使わずにコミュニケーションをとってきたということは、すごくその影響は大きいだろうなと思いますので、そこら辺の影響をどういうふうに払拭していくのかというのは大きな課題だなと思っています。

また、恐らく思春期の子供さんたち、特に中高生ですか、マスクを外せてない子供さんがいらっしゃるというのは、きっといろんな思いがあって、なかなか外したくても外せないとか、着けていることに慣れてしまったとかいろいろあると思うんですけども、それが本当に最後、皆さんが外せるまでどれぐらい時間がかかるのかなというのは、すごく気になっているところです。結構、時間がかかる人も出てくるのではないかなというところもありますので、そこら辺のフォローもきっちりしていかない

と、今後そういう口元を見せずにコミュニケーションとか人と接するということに慣れてしまうと、大事なコミュニケーションツールが使えないということになりますから、そこら辺はうまくフォローしていけたらいいなというふうに感じています。

以上です。

○石井市長　　ちょっと大変、多岐にわたりましたので、全部を一つ一つ蒸し返しても切りがないところなんですけれども、幾つか気になるところを３つぐらい、私の中で今、私の頭の中だけで整理をしてますけれども、それについてちょっとコンセンサスを入れたいなと思ってます。

ＩＣＴのほうについては、ＧＩＧＡスクールについて、これ本当は別枠でもう一回総合教育会議をやらなければいけないなというふうに思ってるところです。といいますのは、大変ポジティブに、それからさっき生成ＡＩというような話がありましたけれども、結局、次の機器更新が何年後。

○谷口教育研修課担当課長　　令和８年なので、あと約３年後。

○石井市長　　約３年後に、次の機器更新が来るわけですね。そのときに、例えばそもそも我々はＯＳをマイクロソフトにしたというようなことで、結構お高い調達をしたというようなことがありました。それから、オンラインを基本的に休校になったときに必ずやるということでしたから、Ｗｉ－Ｆｉをいっぱい買ったとかいうようなこともありました。そして、そもそも全部充電をうちでさすというようなことで、重いのを小学校１年生にもえっこらえっこら毎日持って帰らせたというようなこともありましたし、あとは今、藤原さんが言っていただいたように目の視力に対してのネガティブなインパクトの問題もある。生成ＡＩの話云々になると、生成ＡＩがやっていることそのものがちゃんとしているかどうかを判断する学力を担わせるには、そういう意味では少なくとも小学校１年生、２年生、３年生でそれを使うということはあまりないのかなと思いながら、その文科省の相場観と、あとそれから一方で、それが全校でやる意味で、どこからどういう使い方をさせるか。どういう学年において、どうい

うタブレットの使い方が本当に意味のある事なのかとか。あとは、先ほど北田さんが言いましたけれども、全般的にタブレットの使い方はそれなりにいっていると言いましたけれども、オンライン学活なんかは当然１００％じゃなきゃいけませんから、あと７．９％は当然どうにかしなきゃいけないなと思ったりするところでもあります。

いずれにせよ、ちょっと一方でこのＧＩＧＡスクール、ＩＣＴのことについては大変議論もありますし、この先の展開もありますものですから、評価するところ、仕分けるところ、これがあるなと思っております。ですから別建てしたいなと思っていますが、このＩＣＴのことについて次、そういう議論になるのであれば、こういう視点も忘れずにとか、ちょっと言い忘れたとか、ないし教育長なりからＩＣＴ、ＧＩＧＡスクールのことについて今、お話のことなどあればいかがですか。

○重松教育長　　ＩＣＴについては、いろいろあると思います。特にコロナの入ったときに、なったときにこれが入ってきているので、そういう意味では最初オンラインから始まったということは言えると思います。通常は使っていたはずなんですけど、まだまだ要するにコンピューター室があって、そこで使っているという状態で全員が持っていたわけじゃないので、なんせスタートしたときがオンラインで始まっていますので、そのときはコンピューターをどう使うかというところにはなっていないということがあります。

それと、もう一つ大きな問題は、このコロナの３年間を越えて今、授業の在り方が変わってきてます。要するに、協働的な学びと個別最適な学び、それにＩＣＴが絡んだという形になっていますので、要するにいろんな情報を取る使い方、それを使って人と人とでいろんな議論をしたものをまとめるというやり方、全部のいろんなことが出てきてますので、要するに今までと違うコンピューターの使い方が出てきています。ですからその意味で教員の研修を十分にしないと十分に活用ができないなと思っていますので、今後はそのＧＩＧＡスクールのスタートパッケージを作った時に教員の研修もスタートしたのですけど、なかなか十分にできてないという状況があります

し、特に若い人は問題はないんですけど、こんなことを言ったら怒られますけど、ある年齢から上の人がなかなか十分使いこなせていないということがありますので、そういうことを合わせて、これを使った授業の展開をどんどんしていかなければいけないなというふうに思っています。そのことによって、いろんなことができます。ただ、この授業の使い方についても、ＩＣＴが入ったことによって３つ使い方があって、１つは先ほど言った授業の中でどう使うか、もう一つは公文書をどうするか、そして３番目が成績処理の仕方というのが大きな課題になっていますので、その中でどう使うか。だから、特に一番難しいのは授業の中での使い方、校務だとか採点だとかはすぐできますので、すぐできるというか誰かに教えてもらえば割と比較的簡単にいきますけど、授業になると先生が子供と対して授業をしますので、どういうふうに使うかといったことがきちんとできないと、ただ単にコンピューターを使っただけになってしまうので、なかなか難しいというのがありますので、今後これが大きな課題かなというふうに思っています。

ただ、先ほど言われたオンラインについては、何かあったときにすぐにつなげるという、これはまず逆に学校だけじゃない、不登校の問題にもつながっていきますので、そういう意味では大きな役割になるなというふうに思っています。

私からは以上です。

○石井市長　　そうですね。今おっしゃっていただいたように、学びの部分と校務の部分と、それから事務の部分というような形だったと思いますけど、こちらはそういう意味では毎日パソコンに触っているかどうかとかいう、そういう指標ではなく、ちょっときちんとした指標と見方を全体的に示せるように考えていきたいと思いますので、今日の部分は一方で長岡さんが言ったように、もはやあるのが前提というようなことですので、そういう中でどううまく使っていくかということで、今後議論を深めていきたいと思います。今日は、ちょっとこれはこのテーマにしたいと思います。

それから学校経営のほう、これまたちょっと教育長のほうから、先程杉田さんから

も御説明がありましたけれども、結局、コロナのときに先生御自身がお休みになるとか、あとは今、残念ながら実際に休暇を取られる先生が出てきた中でカバーしきれないとか、そういう中から今いろいろな指導体制について考えていこうというようなことですけれども、一方で、これはあれですか。質問を含めてコメントをいただきたいのですけど、質問の答えを含めてコメントをいただきたいんですけど、各学校がどういう指導体制でやるというのは、教育委員会がスタンダードを示すんですか。それとも、それこそまた各校長がそれぞれの学校においてのマネジメントの中での決めなんですか。

○重松教育長　　原則は、それぞれの学校ですね。ただ、基本的に今やっているのは小学校は学級担任制、中学校になったら教科担任制。ただ大きく違うのは、中学校は教科担任制ですけども要するに誰か担任がいて、それから別にプラスの副担任がいて学年主任がいます。ということは、学年の中に２人プラスがあるわけです。小学校は学級担任だけなので、全然プラスじゃないんですよ。そこは大きく違うので、そういう意味では何かあったときに、中学校の場合は担任の代わりにその人が入っていくということができますけど、小学校の場合は本当に教頭が入っていくだとか、そのために休んでしまったら誰か人員を取る、それも１か月以上休まないと駄目なので、急にできないという状況があります。

　ですから今、人が足りないというのはありますけど、そのシステムをどうするか、要するに小学校にプラスアルファの人をつけてもらうというのが一番大事かなと思います。ですから、いろんな意味で県や国に要望はしてますけど、ただ、今、新しい学習システムで小学校の高学年に教科担任制が入っていってますので、そういう意味ではプラスができてきています。それは、小学校と中学校の間をつなぐための、要するに不登校出たりしないように中学校と同じようなシステムをということで、中学校が慣れるように小中連携をしっかりしようということでつけているわけですから、その意味ではプラスが一応出てきてますけども、もうちょっとたくさんいろんな人が入っ

たらいいかなというふうに思っています。

ですから、コロナの前にはそのことがかなりあったんですけれども、まさかこのコロナになって３年間のうちにこれだけ教員が不足するという状況には、ちょっと考えられなかったので国なんかに言ってますけど、関西は大体高齢化の退職の人がかなり減っているんだそうです。今、これからは関東と東北が大変なことになる。要するに高齢者の人が退職するので、その補充をどうするかという問題があるので、秋田なんかは本当に採用試験が１．２倍にもならない１．０何倍とか言ってますので、あとの人は臨任としてやっていくしかない状況になっていますので、ですから、一番いいのは教員の採用試験が県で１．５倍ぐらいで、もし駄目だった人は臨任に回ってもらうとかできればいいんですけど、その人たちが今、臨任に回らないので止まっているという。ですから、最初のところはある程度先生たちが入ってますけど、途中で産休や育休に入ってしまうと大変長くなってしまうという状況になっていますので、なかなか難しいなと思います。

ですから、これは国や県に要望していって、そういう人をつけてもらうということが一つ必要かなというのと、もう一つは、そこにありますように学級担任制と教科担任制とチーム担任制とありますけども、チーム担任制にして学級担任はいませんよというシステムがあるんですけど、小学校がそれをやってしまうと、うちの先生誰ということになるので、しかも学級数が多くなると先生が子供の名前を覚えられないという問題も出てきます。大体３学級までなら何とかですけども、小学校なんかは６学級のところもありますので、そうなったら３５人×６、つまり２００人以上の子供たちの名前を全部覚えなければいけないので、授業が始まったら学校の先生は名前で呼ぶというのが原則というか、そういうことをしないとさっき言った、子供と先生の間つながりが十分できません。そういう意味ではなかなか難しいなと思うんです。

ですから、一番いいのは先ほど言ったように学年に何人かプラスアルファの先生をつけてもらうのが一番いいのかなというふうに思っています。ですから、市長さんが

言いましたように、社会人を活用して何かのそういう人たちが入れるシステムをつくってもらえればありがたいかなと、ですから県のほうか国に、そういうような新たな教員採用の仕方をしてもらわないといけないのかなというふうに思っています。

ただ、国のほうでは今まで採用は９月か１０月で締め切りでしたけれども、今度は６月にしてしまうというふうに言ってますので、来年からは早く教員の採用が始まりますので、それに合わせて先生たちが不足している分は、臨任で取れるかなというようなことを思っています。

以上です。

○石井市長　　そういう中では、今特にここにある上の問題、教員の未配置と多様な児童生徒の対応、そういうようなことがあって、そして一方で教科担任制、チーム担任制のデメリットもあるけれども、そこは要するに情報共有というようなものが主であれば、その情報共有の在り方のスタンダードとかは、教育委員会がぜひ整理をしてもらって、今学級担任制一本やりだと厳しいよというような背景になってきた中ですから、ぜひそちらは、いわゆる右側のほうがそれぞれの学校でできる環境・指導をしていただきながら、教員の数についても県とやらないといけないところですけれども、そちらのほうはちょっと私からそうした形でお願いをさせていただきたいと思います。

ここまでのところで、何か意見追加である方いらっしゃいますか。

じゃあ、あと３つ目は、ちょっとこういうまとめで行きたいんですけど、今、お話を聞いていると西宮市の場合は、これはいい悪いという問題じゃなくて、各学校での決めが多いじゃないですか。多いように思うんですけども、そういう意味ではそれぞれの校長さんが責任感を持ってやっていただいている、それは当然いいことではありますが、一方でコロナのときにありましたよね。感染に対する予防策とかいう意味では、やっぱり学校の一人の校長先生が十分に例えば保健所の素養も備えてないかもしれない。それから、全部の厚労省なり文科省の通知を読み切れてないかもしれない。

そういうようなこともあろうかと思いますので、ぜひ、それぞれの学校でマスクの着脱に対する指導の濃淡というのがあるように思いますので、そこはいい意味でのいいコロナ前のものに戻すという意味では、若干まだかたくなではないですけど、まだそこの指導が不十分なところがあれば、そこはしっかり教育委員会から情報を知らせるというような意味での指導といえばおかしいのですが、各学校への連絡をお願いしたいなと思います。

あわせて、今日はちょっと卒業式のお話がございました。これも最終的には、各学校長の出ていらっしゃる検討委員会、行事とか、教育課程検討委員会というようなことであります。ですから、そこには私ないし教育長の一存でものが決まるということではないということをシステム的には認識しているところでもあります。

一方で、その中で議会からも多くの御指導もあって、また教育委員さんの中からもそうした御意見もあった。

一方で、その教育課程という中で位置づけられた卒業式でもありますので、そして令和５年度はもうここまで走っているという中で、どういう結論を得るかはこの委員会が最終的に決めていただくということしかないわけですけれども、その中にはいろんな意見があるんだよということをしっかり教育委員会から、その検討委員会に伝えていただく中で、そうしたことでの検討を深めていただきたいなと思います。

○重松教育長　　その件についてですけど、私のほうも今年の３月と４月の時点で卒業式については検討してほしいと校長会にお願いしました。今のところ検討委員会のほうで検討しましょうという形で今やってます。校長会としては今年はひょっとしてというのもありますけど、来年以後は移動させようというようなことは思っているみたいです。

ただ、一番の問題はなぜこういうことを言うかというと、そもそも兵庫県の入試が遅いんですよ。全国に比べたら。なぜかと言うと、要するに私学の入試だとかが兵庫県は遅いので、それに合わせて卒業式をずらせていってますので、その上に学科だと

かコースだとかの試験が２月にありますので、どうしてもそれより前に前倒しができないんです。今は入試から発表までの間が空いてますからいいですけど、その前、入試の採点ミスがあった以前はもっと短かったんですよ。だから、卒業式が終わったら本当に３日か４日に発表があったので、とてもじゃないけど、それは無理だったわけです。なぜなら、卒業式するための練習もしなければいけないので、要するに入試があって発表までの間が、短かったのでその間に卒業式を入れるのは難しかったのですけど、今回、さっき言ったように採点ミスが今から１０年ほど前あって、そのことで合格発表が延びたのです。入試から１週間ぐらい、発表がありません。ですから、その間はできるようになったことがあるんですけど、ただ、去年は入試が、卒業式があって次の日が入試だったんです。今回は、今の案ですと卒業式があって入試までに３日間のゆとりがあります。

逆に、そうすると入試の後に、卒業式をするかといったら、入試の次の日に実技があるので、２日間の間をあける必要があります。つまり１日は実技の試験に、１日は卒業式の練習に充てることになります。つまり入試が１２日（火）、次の日が実技となると、間に土、日を挟むので、果たしてこれでいいのかなという問題もあります。

ですから、今年については検討中ですけど、来年以降は必ずやるというふうに校長会のほうもある程度、方向を示しているので、現在検討をしています。ちゃんと説明がつくように検討していますので、その点は御理解いただきたいと思います。

以上です。

○石井市長　　いやいや、もちろん、様々いろいろ考えていただく中で、それとあとは現場とのコンセンサス、それから何より子供たちとのコンセンサスと、それから保護者の皆さんとのコンセンサスも入れながらお願いをしたいと思います。

全般的にそういう中で大きな３つのまとめは、このぐらいかと思っておるのですが、一方で今、卒業式の話もそうですけども、藤原さんもおっしゃった、そもそも運動会とはどうあるべきかとか、そもそも自然学校とは何ぞやとか、そういうような話

も機会としては大変いい水面に石は投げられているなと思うところでもあります。

こうした、今日提起いただいたことについては様々また受け止めて、教育委員会と我々とでやっていきたいと思います。

特段あれでなければあれですけども、何か折角ですので私と教育長のやり取りで最後２、３０分なりましたが、追加でお話しいただくようなこと、山本さんいいですか。

○山本教育委員　　はい。これは、今日の議題と直接関係ないことかもしれません。電気代が高騰していることで補正だけでもすごい金額が出ていましたよね。あれを見たときに思ったことがあります。各学校の電気代の高騰分というのは各学校は知っているでしょうけど、前年度よりも減っていたら、その減った分の何％かを学校配分予算に乗せるというような発想はできないのかなということを考えました。結局そうすると、自分の学校がどれだけ使っているかということに意識がもっと働いてくる。その分の少しだけでも学校予算に入ってくるとありがたい。とにかく補正額を見たときに３、４年の補正額で学校が一つ建つと思ってびっくりしたので、ふとそんなことを考えました。

○石井市長　　そういう発想、私大好きです。

もし、そうであれば藤井さんがその仕組みをどう考えるかなんですけど、藤井さんどうですか。

○藤井教育次長　　電気代で言えば、当初予算と比べてもほとんどそれに近いような補正額を昨年度計上しました。それで、前年度減った分を翌年度の予算にということなんですけども、なかなか単年度予算ですので、それをそのまま次の年に持ち越すということは難しいんですけども、やはり学校の努力というところは評価していかないといけないと思いますので、何らかの仕組みが考えられるようであれば検討はしたいと思いますけど、なかなか難しいかなと思っております。

○石井市長　　いやいや、校長経験者の山本さんからそんな意欲的なことを言っても

らえるのであれば、これはぜひ、それまた内部事務改革と言ってるときですから、それはまた考えていければと思っております。

じゃあ、今日はちょっと多岐にわたりましたけれども大きなポイント、それから御発言いただいた点について今後、特にコミュニケーションが３年間十分にできなかった子供たちの影響が、今後長引く可能性もあるということなどを含めて、そうした言葉を受け止めて今後の対応をしていただければと思います。

いろいろたくさんお話しいただきましたけれども、最後のまとめとして教育長から御挨拶をいただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○重松教育長　　本当にありがとうございました。

アフターコロナでいろんな対応を、これからどうしたらいいのかということでいろんな助言をいただきましたので、それに合わせてこれから教育の在り方を考えていかなければいけないんじゃないかなと思ってますし、また逆に言えば、ちょうど学制が始まって１５０年が去年でしてましたので、そのときにやっぱりいろんな課題が言われました。特に同調性圧力が非常に強い、それぞれの個性に合わせて学校教育をやっていく必要があるんじゃないかというようなことも言われています。そういう意味でもいろんな課題が出て来てますので、それを一つ一つ解決していくというか、やっていかなければんじゃないかなと思っています。逆に言えば、それまで伏せていたものが全部出てきていますので、その意味では、今日いろんな話ができてよかったなと思っていますし、昨日ですか、文部省のほうから総合会議を十分に活用して教育委員会と市長が一生懸命協議のために頑張っていく必要があるんじゃないか、そのためには総合会議を十分活用してやっていっていただきたいということは、文部省から通知が下りてきてましたので、そういう意味で今日こういう会議があるのは非常によかったかなと思っていますし、これからもまたよろしくお願いしたいと思います。

本当に、今日はありがとうございました。

○石井市長　　それでは、今年度１回目の総合教育会議、これにて終了したいと思います。ありがとうございました。

閉会　午後３時２２分